

1. 創設50周年を迎えた理工学部

2012年、上智大学理工学部は創設50周年を迎えた。10月に行われた記念式典で、滝澤正学長は、理工学部の創設は上智大学が総合大学としての発展する基盤となったこと、今後も理工学部が「文理融合教育の実現」を担っていく上で重要であることを指摘した。そして、ノーベル化学賞を受賞した野依良治氏が記念講演を行った。



また、理工学部は同年秋から英語で講義を行うコースを開設した。これは文部科学省の国際化拠点整備事業(グローバル30)の構想に基づいたもので、物質生命理工学科の「グリーンサイエンスコース」と、機能創造理工学科の「グリーンエンジニアリングコース」に、5人の第一期生を迎えて始まった。

新たな時代を切り開く重要な役割を担う理工学部開設までには、国内外の多方面から支援と関係者の尽力があった。

また、理工学部は同年秋から英語で講義を行うコースを開設した。これは文部科学省の国際化拠点整備事業(グローバル30)の構想に基づいたもので、物質生命理工学科の「グリーンサイエンスコース」と、機能創造理工学科の「グリーンエンジニアリングコース」に、5人の第一期生を迎えて始まった。

2. 開設準備

1958年、上智大学創立50周年の記念事業の一環として、理工学部の創設が計画された。もともとイエズス会の創始者であるイグナチオ・デ・ロヨラが作成した教育の規範「学事規定」には、自然科学を教育に組み込むよう記されており、16世紀に府内(現大分市)に作られたイエズス会の高等教育機関であるコレジヨでも天球論などの自然科学教育が行われていた(講義録『コンペンディウム』による)。



理工学部設立講演会で挨拶する大泉学長、右は石坂泰三氏



3号館建設予定地の鍬入れでのアデナウアー・ドイツ首相、左はルーメル理事長

そして、日本が1950年代後半から高度経済成長期を迎え、特に1960年、所得倍増計画が決定されると、文部省は理工学系の教員・学生の増強を図り、産学連携を重視した。そのため東京大学では1960年代、理工系を志願する学生が倍増した。他方、水俣病などの公害問題の発生も、理工学の研究の必要性を認識させた。

上智大学では1958年1月、当時の大泉孝理事長が理工学部開設計画を発表し、学内に設立準備委員会を設置。多額の費用を要する学部新設のため、学内外での募金活動が始まった。

3. 設立資金の準備

1961年1月に発足した理工学部設立後援会には、会長に経団連の石坂泰三会長、世話人として吉田茂元首相や石川島播磨重工の土光敏光社長など、日本の経済界の主導者が肩を並べた。この後援会から約2億円の寄付が寄せられた。

また海外では、当時のクラウス・ルーメル理事長がヨーロッパで精力的な活動を行い、ローマ法王庁、イエズス会本部、ケルン教区、ドイツ連邦共和国などから多額の資金援助を受けた。また、募金についてはフランツ・ヨゼフ・モール神父がドイツのケルンに滞在して奮闘し、他のミラー、マッコイ、ドレスマンの3神父はアメリカでの募金活動を展開し、建設資金の20億円の見通しが立った。

そうした中でも、とくにドイツの政府や民間から、資金と高額な機器や機械が寄贈された。そのため1960年3月にドイツのアデナウアー首相が来学して、理工学校舎となる3号館校舎の敷地に鉄入れを行った。理工学部創設50周年記念式典でドイツのケルン大司教区のヨアヒム・マイスナー枢機卿に感謝状が贈られた（代理としてモール上智学院元財務担当理事が受領）背景には、このような事情があった。

こうして上智大学理工学部は1962年4月に開学。しかし、3号館の完成は11月（1961年7月に着工）まで待たねばならなかった。それまでの間、授業は駐留軍から譲り受けたカマボコ型兵舎で行われた。

実験施設は1962年に完成。円筒研削盤、工具研削盤、旋盤、単軸自動版、など優秀な工作機械がドイツの重工業メーカー、クルップ社から寄贈された。そのため、この実験棟はクルップ・ホールと命名された。1965年に建設したマシンホールには、電気動力計5台を設置し、電気・電子、物理、化学などの実験を要する学科にも最新鋭の装置が導入された。

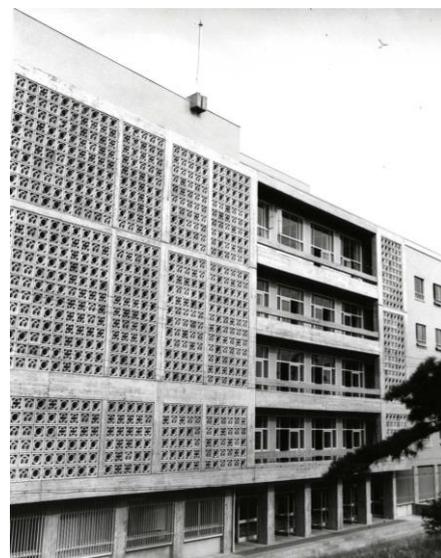
4. 総合大学へ

理工学部は、工学と理学の融合を目指し、機械工学科、電気・電子工学科、物理学科、化学科の4学科で始まった。また語学教育の充実や国際的な視野をもち、教員と学生のきめ細かな指導体制が理念として掲げられた。この教育体制はその後継続され、2008年、新たな3学科体制（物質生命理工学科、機能創造理工学科、情報理工学科）になった後も堅持されている。



4号館が竣工(1965年)

学部開設後、入学定員の増員、数学科の増設（1965年）、化学科は化学専攻と応用化学専攻を設けるなどの改組を行った。さらに、卒業研究実験のためのスペースが足りないなどから、新たに4号館の建設構想が持ち上がり、1965年4月に4号館が竣工した。1966年には大学院理工学研究科修士課程を設置し、機械工学専攻、電気・電子工学専攻、物理学専攻、化学専攻、応用化学専攻の5専攻を設けた。また1968年には同専攻の博士課程を増設して、学部から大学院への一貫した教育体系を整備した。このようにして、上智大学は、名実ともに理系・文系を併せ持つ総合大学となった。



3号館が竣工(1962年11月1日)



ドイツから寄贈された分光光度計(ツァイス社)で実験する学生(1963年)